

まきむく

纏向
考古学通信
Vol. 19
2025.09



▲纏向犬生体復元模型

特集 |

纏向犬復元プロジェクト

令和6年度まきむくレポート

発掘された纏向遺跡R6

纏向幻想—卑弥呼に会いに行く(6)—

まきむく裏物語：木製品がなぜ残るのか、そしてその貴重さ

纏向犬復元プロジェクト

2015年1月、纏向遺跡第183次調査において居館をとりまくとみられる3世紀前半の区画溝から、まとまったイヌの骨が出土しました。骨の出土点数は140点余りがあり、全身で約300点あるとされるイヌの全身骨格の約47%が出土したことになります。纏向学研究センターでは、古墳時代の犬骨の出土事例が極めて少ないとから動物考古学、解剖学、古代犬ゲノム研究者、各分野の専門家とともに出土骨の詳細な調査と研究を行ってきました。その結果、生体復元に必要とされる頭骨や左右の後肢骨の多くが良好な状態で残存していることが判明したため、令和6年度にイヌの生体復元模型の製作を実施しました。

纏向遺跡は、邪馬台国におかれた倭国の首都で、倭の女王「卑弥呼」が居た場所と考えられています。また、犬が生きていた時代はまさに卑弥呼が活躍していた頃にあたります。居館の近くから出土したことも併せて考えると、卑弥呼がかわいがっていた犬なのかもしれません。

纏向犬復元のようす

まず、出土した犬骨のレプリカを作成し、不足している部分は類似した他の例を参考に作成した骨のレプリカを利用して、全身骨格を組み上げました。そこに粘土で、筋肉を肉付け、皮膚や毛並みを復元し、それを原形にして樹脂製の模型を製作しました。犬の毛色に関してはDNA分析ができなかったため、当時いたとされる茶系と灰系の2種類の模型を作成しています。



▲CTスキャンによる犬骨の3次元データの作成



▲3Dプリンターによる犬骨のレプリカの作成



▲骨格の組み上げ作業



▲骨格への肉付け作業



▲肉付け後の粘土原型の検討



▲生体復元模型への彩色作業



▲生体復元の検討会

それぞれの製作段階で幾度となく検討会を重ね、完成した復元模型は足先から肩の高さが約48cm、胸からお尻までの長さが約58cmとやや胴が長く、現在の四国犬や紀州犬のメスと同じような大きさです。体格は華奢で正確な年齢はわからないものの1歳半以上の若いメスと推定されています。

このように、骨格から動物学的検討を重ねてイヌの形質を復元した模型としては国内では2例目で、古墳時代のイヌとしては初めての事例です。考古学のみならず、多様な分野の専門家の協力を得て作成された縄向犬の生体模型は日本におけるイヌの歴史や形質の研究上、高い学術的価値があるといえます。

生体復元模型完成記者発表



▲記者発表のようす

(左から松井市長、寺沢所長、上田教育長、橋本統括研究員)

2025年4月22日（火）に縄向犬の生体復元模型の完成を記念し、記者発表を行いました。多くのメディアからの取材があり、全国規模で報道されました。

また、4月から6月までの間に縄向犬がより一層親しまれるように愛称の募集を実施しました。約2か月の応募期間でしたが2,143件もの応募が寄せられ、フランスや韓国など国外からの応募もありました。

愛称は10月頃に発表される予定で、採用者には表彰のうえ、記念品が贈呈されます。年明けには縄向犬関連のイベントの開催を予定しておりますのでご期待ください。

纏向学セミナー

年に2回、纏向学に関連するテーマにて、お招きした研究者に講演いただき、その後、当センターの寺沢薰所長と対談いただく企画です。

第20回は2024年7月13日に共同研究員の来村多加史氏（阪南大学教授）をお招きし、「邪馬台国時代の中国事情」と題して開催しました。2025年1月25日の第21回では共同研究員の奥田 尚氏（奈良県立橿原考古学研究所特別指導研究員）をお招きし、「奈良盆地東南部の前期古墳の石室材・石棺材の変遷と人々の動き－纏向付近の古墳を中心として－」と題して開催しました。両回とも会場は大盛況で合わせて472名の方にお越しいただき、皆さん、講演・対談ともに熱心に耳を傾けておられました。



▲第20回：来村氏と所長の対談



▲第21回：奥田氏の講演

纏向考古楽講座

纏向遺跡や考古学に興味のある初心者向けの講座です。2024年11月9日、16日に2回連続講座として開催し、延べ11名の方に参加いただきました。今回は「遺跡の測量」をテーマに、測量を体験していただきました。

第1回では、発掘調査において行う測量についての解説を行い、簡単なリハーサルとして部屋の形を平板で測りました。第2回目では、辻地区の大型建物群跡



▲第1回：解説のようす

を訪れ、復元されている柱列を平板測量し、実際に平面図を作成する作業を行いました。

参加者の皆さんからは、「発掘の大変さが分かった。」「発掘調査にも参加してみたい。」といったお声をいただき、普段聞きなれない測量についての解説や測量作業の体験から、発掘調査を行い、遺跡の記録を残すということの重要性について知っていただけたと思います。



▲第2回：平板測量の体験

発掘された纏向遺跡 R6

纏向遺跡第205次調査

期間：2025年1月8日～3月31日

面積：147m²



▲205次調査区と箸墓古墳（北から）



▲205次調査位置図

第205次調査は、纏向遺跡の中でも最も大きい微高地である太田微高地で実施しました。調査地周辺では、これまでに複数の祭祀土坑が確認されており、木製仮面に代表される数多くの祭祀に関連する遺物が出土しています。今回の調査では太田微高地南域の集落構造を考える上での手がかりとなる遺構・遺物を確認することが期待されました。幅1.5m、南北約100mの狭くて長い調査区からは、主に3世紀後半から4世紀にかけての数多くの遺構を確認することができました。主な遺構としては大小さまざまな規模の土坑や溝、また非常に多くの柱穴などが確認されました。これらの中には削抜き式の井戸枠を持つ井戸もありました。井戸は元々幅6m程の溝があった場所に、その溝が埋まつたのちに掘削されていました。井戸枠は径60cmで深さ約130cmを測ります。このように今回の調査では、非常に狭い調査区ながらとも多くの遺構を確認することができました。3世紀後半から4世紀にかけては纏向遺跡がその範囲を拡大させる時期であり、今回確認された数多くの遺構は遺跡の拡大に伴い非常に多くの人々が纏向の地で活動していたことを改めて教えてくれました。今後も周辺の調査を進め纏向遺跡の動向を明らかにしていきたいと考えています。

(飯塚健太)



▲井戸枠全体の検出状況



▲井戸枠内面の工具による加工の痕跡



卑弥呼の出自は定かでない。会同が終わった後、部屋から出てきた要人を捉まえてはインタビューを試みる。「新しい倭王は女性らしいが、一体どこの王なのだ？ いかなる素性の者なのか？」。しかし、誰も答えようとはしない。いや、実際よくわからないようなのだ。新生倭国（ここでは「イト倭国」に対して「新生倭国」と呼ぼう）の初代女王卑弥呼の誕生はその初めから謎に包まれていた。

◆

卑弥呼は最後のイト国女王の子女だとも宗女だとも噂は流れる。いや、あのキビ国王の宗女に違いないという噂もまことしやかに広がっている。さらに遠く東のクニ、それはヤマト国で見いだされた王族の子女だとも語られる。公孫が彼の地から連れてきた王族の子女を強引に倭王に仕立てたらしいという突拍子もない噂までがまことしやかに流れる。

取材を続けてもやはや埒が開かない。しかし、肝心のイト倭国（クニ）の王たちやキビ国を盟主におくサヌキやハリマなどのクニ・國の王たち、イヅモ世界のクニ・國の王たちはなぜか姿を晦ませてしまった。やはり会盟文が公表されるまで、今暫し待つしかない。

会同の開かれたナ国連合の傍国居館は静寂に包まれていた。居館一帯は警護の兵に守られて一人として近くことを拒否している。タイムマシンが着地した居館を見下ろす低い丘の木々もすっかり色づいてきた。海を越えてくる風も心なしか冷気を帯びる。一体、いつまで待つのだろう。タイムマシンの不具合を心配し

つつさらに十数日が過ぎていった。

集落に出入りする住人を掴まえては日々、そのようすを聞き取る。新しい女王候補はどうも成人前のうら若き女性のようだとも言う。その女性は新しい倭国が打ち立てられ、その都が完成された時に、初めてその姿を顕すらしいというのだ。近々会同に参加したクニ・國のオウや王たちがふたたび招集され、会盟文が読まれ盟約書に血判が押される運びになるらしいとも言う。

◆

はたして数日後、東雲の空が開け来る卯の刻頃、クニ・國の王たちがわずかな側近や兵を引き連れて続々と居館に結集はじめた。溢れんばかりの者たちが居館を見守り静寂が続く。一刻ほどが過ぎただろうか。突然、なかから「噫噫（おう・ああ）」という絶叫が聞こえ、程なく王たちは居館の階段を次々に下り立ち、配下の者たちに迎えられて散っていった。

私はすぐに面識を持ったイト倭国のあるクニのオウを掴まえて、会盟文の写しを記録させてもらう。そこには新時代の到来を告げる驚くべき盟約の内容が記されていたのだ。その内容の要約を簡単に披露しよう。それはおよそ次のようなものであった。

- 1、新生倭国は、イト国を盟主とした旧イト倭国体制を廃し、西日本のおもだった部族的国家を中心とする汎列島規模での連合国家体制を目指す。
- 2、新生倭国の政治体制は合議制とし、主要な部族的国家王（旧イト倭国、キビ国連合、イヅモ連合、タニハ連合、コシ連合および畿内・ヤマトの雄国など）による寡頭体制によって王権を運営する。
- 3、新生倭国の王都は、イト国内から新たに畿内のヤマト国内の纏向に移転し、都市建設を急遽開始する。
- 4、新生倭国は、政治的・祭祀的な象徴的記念物として新たな大王墓を創造し築造する。
- 5、新生倭国の祭政の頂点とも言うべき最初の王は女性に限られる。然るにその女王の婚姻は認めない。
- 6、新生倭国は遼東王たる公孫康に臣属する。
- 7、この盟約を実行するにあたり、ヤマト国内での新王都と王宮の造営を急ぎ、2年後の正月を以て王権、王都の開闢にあわせて、直前の冬至の日に新王即位の儀を執り行う。

◆

この盟約に、私なりの説明を少し加えよう。

1と2は、前回の会同での議論の流れから見ても、十分納得できることだ。新生倭国体制の合意はイト倭国体制の否定によって、しかもそれに替わる特定の部

族的国家・王を盟主とすることを認めないという共通認識のもとに成立したからである。

3も、1と2の方針からすれば当然の帰結だろう。強力な外的権力を有する部族的国家の領域内には新首都は造営しないという決意の表れだ。ヤマト国には強い政治権力が生まれていなかったにもかかわらず、生産力、流通や経済、技術や文化面では高い水準が認められる。自然環境の卓越性や地理的な条件も良好だ。合議制に基づく新政権の拠点としては無二の場所と言えるだろう。のちに、ヤマト王権が東へと勢力を伸張していく事実を見れば、列島各地を結ぶ交通の結節点にあたり、河内湖から大和川を遡った盆地の奥部は最適地であった。

4は、まさに前方後円墳の創生を意味する。規模、規格、構造、威信財などによって大王墓を頂点とした階層化を「見える化」して発信し、一元化したことこそが倭国「新生」の真骨頂であろう。それまでの多様な政治体制や多元化した祭祀を廃し、中央による地方支配を実現したことは、林立する「部族的国家」群からなる国家形態をはじめて「王国」という一つの国家形態に集約したことを物語る。これより後、新生倭国は律令国家を目指し、点の集合であったモザイクを面に埋め尽くしていく作業に奔走するのである。

5は、当面、新政権内の旧イト倭国勢力や他の強大な部族的国家・王の主導によって世襲独裁されないための方策である。卑弥呼が魏志倭人伝に「年長大なるも夫婿なし」と記された理由はそこにあった。それは「倭国乱」を満場一致で乗り切るための必要な条件でもあったのだ。

そして6こそは、公孫の最も譲れない条件であった。この盟約のために公孫は会同を画策し、臣属することの盟約を強制的に勝ち取ったのである。

西日本の主要な部族的国家を「薩長(土肥)」に、外圧をかけてきた公孫を「歐米列強」に擬えると、「倭国乱」という膠着した政治社会を乗り越えんばかりの意気込みは、幕末の状況にも重なるところがある。私が卑弥呼共立=新生倭国の誕生と王都の東遷という新時代の幕開けを「3世紀の明治維新」に喻える所以だ。

こうして、ヤマト国の三輪山西北麓の纏向川が扇状に広がる1kmほどの微高地上を中心に、大規模な都市建設が始まった。直前まで無人に近い原野ともいえる土地に、多数のクニ・国から派遣された首長層や役人、技術者や労働者が終結して、急ピッチで新首都の造営が進められたのである。

最初に、河内湖から大和川、初瀬川を遡り、さらに

纏向川に侵入して大王宮用地に向かう運河が開鑿された。大量の建築部材や物資を搬入するためのルートづくりである。多数の作業小屋や倉庫、住居が建てられ、主要な部族的国家の出張施設も建造されるなか、第1次の王宮(私たちが「第1次下層(第1期)大王宮」と呼ぶもの)が建設される。

残念ながら、纏向の発掘に関わってきた私たちでも、未だにこの最初の大王宮のすがたは朦朧としか見えていない。しかし続く第1次上層(第2期)大王宮は漸^{ようよ}うその全体像が見えかけてきた。この第2期大王宮こそはおそらく、公孫氏を滅亡へと追いやり海東・海北にまでその覇権を広げてきた魏の外臣となった景初三(239)年直後に急遽造営されたものに違いない。

しかも、この時の動員は会同に参加したクニ・国だけにかけられたのではない。新たに東の地域のクニ・国のオウにも伝えられた。東国では新生倭国構想への造反、牽制、静観が多かったなか、イセやスルガ、サガミ、カズサなどのクニのように早々と参画するクニグニも出始めた。

こうして、大王都纏向と最初の大王宮の建造は新生倭国という王国権力の総力を挙げておこなわれていった。それは、私たちが「ヤマト王権」と呼んできたもの実体でもあり、「卑弥呼」政権そのものだったのだ。そうであれば、魏志倭人伝に「南、邪馬台国に至たる。女王の都するところ」とある以上、倭女王卑弥呼が都した大王都纏向が置かれた「ヤマト国」こそが邪馬台国そのものであることは道理だ。

こうして、大王都纏向の完成は、新生倭国の誕生と女王卑弥呼の即位を高らかに宣言する予定の西暦20■年(■の数字がぼやけてよくわからない)の正月にはなんとか間に合ったかに見える。

しかし、卑弥呼の出自はいぜんとしてわからない。寡頭体制を率いる重臣の数人しか知らないのだ。それだけ新生倭国の初代女王の出自は秘密とされた。権威の裏に特定の部族的国家の名を出さぬこと、その出自も能力も、姿形さえベールに包まれたままにしておくことが希求されたのだ。魏志倭人伝が語る「見るあるもの少なし」とは、まさにそうした卑弥呼のあるべき姿と日常を評した的確な表現でもあった。

次回は、何があっても卑弥呼の即位式には参列しなければならない。未完成の頼りないタイムマシンではあるけれど、次回こそはピンポイントで日時を合わせる必要がある。今は急ぎ現代に戻ってメンテナンスを徹底しておかなくてはならない。

(つづく)

木製品がなぜ残るのか、そしてその貴重さ

まきむく裏物語

発掘調査では農具や建物の部材などの木製品が出土することがあります。通常、木材は長期間放置すると風化や菌類による分解で、腐ってほとんど残ることがありません。では、なぜ木製品が出土することがあるのでしょうか。その鍵となるのは、水なのです。川や溝、地下水の流れがあるような環境では自然に泥が堆積していきます。その中では酸素が遮断され、真空パックのように菌類の活動が抑えられることで、腐朽が格段と遅くなります。また、木の細胞内に水が浸透することで、その形が保たれます。このように偶然の条件が重なり、木製品が残るのです。

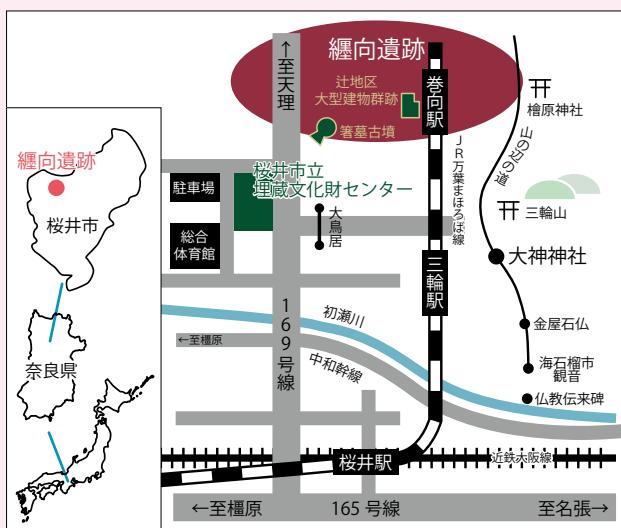
纏向遺跡の発掘調査で木製品が多く出土する遺構の一つに写真のような祭祀土坑があります。祭祀に使用したものを納めた穴で、湧水点まで掘られ、木製品が残りやすい条件が整っていました。ここからは木製仮面や木製の楯、鎌の柄などが出土し、当時の祭祀の様子を知ることのできる貴重な資料となっています。

木製品に限らず、考古学で扱う多様な遺物はそもそも、現代まで残り私たちが出会えること自体が奇跡的なことなのです。そのような貴重な歴史の断片から、当時の生活文化や歴史を復元できることが考古学の醍醐味であり面白さであると実感しています。
(巽優貴)



▲祭祀土坑における木製品の出土状況

纏向遺跡へのアクセス



JR万葉まほろば線 巻向駅下車すぐ
西名阪自動車道 天理ICより国道169号線を南下 約30分

ヤマト王権誕生の地 纏向遺跡を未来へ残したい！

纏向遺跡の調査研究や保存活用事業は「卑弥呼の里・桜井ふるさと寄附金」により成り立っています。研究を通じて纏向遺跡の価値を高め、多くの方に知りたいことで遺跡を未来へ残していくたいと考えていますが、そのためには多くの費用が必要になります。纏向遺跡を応援くださる皆様のご支援を賜りますよう何卒お願い申し上げます。

寄付の申し込み方法など、詳しくは当市のふるさと納税特設サイトをご覧ください。

桜井市ふるさと納税特設サイト
<https://sakurai-furusato.com>



寄附金の使い道は
纏向遺跡の調査研究・
保存活用に関する事業
を選んでね！！



桜井市マスコットキャラクター
ひみこちゃん

編集後記

本号も所員の皆さんに大変助けていただき、何とか発行することができました。纏向犬復元プロジェクトはおかげさまで全国からの注目をいただいております。今後のイベント情報もぜひお見逃しなく。

担当：巽優貴

纏向考古学通信Vol.19

発行・編集 桜井市纏向学研究センター

発行年月日 2025年9月26日

所在地 〒633-0001 奈良県桜井市三輪686

芝運動公園内

TEL/FAX 0744-45-0590

*纏向考古学通信は「卑弥呼の里・桜井ふるさと寄附金」を活用して作成しています。